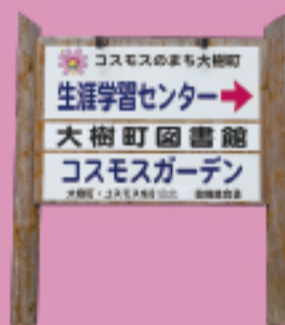


住みたくなる

大樹の ZINE



@Interstellar Technologies



VOL.

1

住みたくなったら...

・とりあえず 聞いてみる

オンライン移住相談はいつでも受付中！
移住経験者の移住コーディネーターとお話しましょう！



・とりあえず 読んでみる

「宇宙のまち大樹町 note」では、移住経験者の
ライターが町内の行事や文化などを定期的に発信中！



・とりあえず 行ってみる

「お試し暮らし住宅」や「ワーキングステイ住宅」など、
気軽に活用できる制度があります！



・とりあえず 登録してみる

LINE公式アカウント「大樹町移住ホットライン」では
移住に役立つ情報発信と相談を受付中！



2022年9月発行 編集・文：岡山ひろみ デザイン：真柳 慧

発行：大樹町役場 〒089-2195 北海道広尾郡大樹町東本通33 ☎01558-6-2111 <https://www.town.taiki.hokkaido.jp>

西には日高山脈がそびえ、東には太平洋が広がる、「宇宙のまち」大樹町。

このZINEは、大樹町に移住した私が

「移住したい」「戻りたい」と思う人たちに向けて作った小冊子です。

家族にプレゼンテーションをして引っ越してきた岸本純愛さん、

札幌からUターンし、町唯一の司法書士になった播間章浩さん、

町に住んで驚いたことを教えてくれた神宮司雄祐さん、下山明花さん、小谷将太さん、

美しい大樹町の暮らしの一部を写真に収めてくれた姉崎史奈さん、

町への愛を思い出と共に語ってくれた服部美咲さん、

美味しいものが多くある中で、とっておきの商品を紹介してくれた佐藤公亮さん、

そして、移住者の窓口でもある大樹町役場の樋口直樹さんと太田翼さん、

総勢10名に登場していただき、

地域おこし協力隊がきっかけで大樹町に移住した真柳慧さんにデザインをお願いしました。

「宇宙のまち」だけど、「宇宙だけじゃないまち」な大樹町。

Uターンしてきた方や移住してきた方が、

どんなふうに町のことを思っているのか、

どんなふうに町を見ているのかが詰まっています。

そして、最後まで読めば、きっと大樹町に住みたくなっているに違いない！

ページ数は少ないですが、どうぞお楽しみください。

移住コーディネーター 岡山ひろみ

あなたもきっと、
住みたくなる。



岸本さん年表



気なうちに住ん

家族みんなに
プレゼンテーション

そんな中、夫の早期退職をきっかけに、これから生活する場所を考える機会が訪れました。都会に住むことを考えていましたが、コロナ禍で病床がひっ迫し、入院すらできないような状況です。「いまま都会に戻ってもしんどいのではないかと、せつかく北海道にいるなら、もっと自然豊かな場所に、元

でみたい」と思うようになったそうです。移住先を検討する中、たまたま大樹町在住の方に出会い、町内を案内してもらった機会がありました。帯広広尾自動車道もあり、小学校は1学年あたり2クラスあり、商業施設なども十分にあり「住むには困らなさそうだな」と思ったそうです。大樹に住むことを家族に提案したところ、なんと、大反対！そこから、岸本さんによる必死の説得が始まりました。しかし、二人の意見は変わらなず。「娘には「自分勝手だよ」と言われちゃったけど…ダメだったら戻ればいいじゃん」と伝えました。最終的には岸本さんが大樹町に家を見つけ、



な人

岸本純愛さん

1980年沖縄県生まれ。高校卒業後、大阪で就職をし、以降4年間関西に住む。2003年に沖縄へUターンし、その後、夫の転勤で愛媛県と帯広市を経て、2021年に夫の早期退職のタイミングで大樹町への移住を決意する。



数ある市町村の中から大樹町を選んだ方にインタビューをする。この企画。沖縄出身、大阪や愛媛を経て、大樹町に移住してきた、岸本純愛さん。どうして大樹町だったのか？どうやって家族を説得したのか？お話を伺いました！

転勤族はつらいよ!?

関西で就職した後、沖縄にUターンした岸本さん。長く沖縄で暮らしていましたが夫の転勤が決まり、2018年に家族3人で愛媛県に引越します。愛媛では、転勤で来た家族が多く話も合い、楽しい生活を送っていましたが、再び夫の転勤が決まります。

「夫からは「北海道は絶対にない」と言われていました。それが突然「えらいことになってもうた、転勤や！北海道や！」と。札幌かと思っ



てどこ？となりました。場所すら分からない帯広への突

然の転勤。仲良くなれた友だちと

夫が根負けし、家族で引越すこととなりました。それが2021年のことです。

移動は大変だけど、不満のない生活

実際に大樹町に住んでみると、懸念していたほど不満はなかったそうです。「町民の方々は程よい距離感で付き合いやすいですし、環境も自然がいっぱいで歩くだけで気持ちが良いですし、スーパーに売っている魚が新鮮で美味しいです」と岸本さん。更に、町内のホームセンターとドラッグストアの品揃えが良く、普段の生活で困ったことは思いつかないそうです。

逆に、移住後に苦労した点は、「町内に大きな病院がないので、何

生活で困ることあるのか？

ない！！

もう決めせんか！

「例えば畑を見て育っている作物を言えるようになりたいし、一反の規模も理解したいし、十勝の文化も知りた



かあったときのことを考えると少し不安です」と教えてくだ

さいました。そんな岸本さんに、これからの大樹町生活の過ごし方を尋ねると、「いろんなことを学んでいき

たい」という言葉が返ってきました。

「積極的に学ぶ場を作っていこうと思います」

※実際には年間を通じて晴れの日が多く、1991~2020年までの日照時間の年平均は2,020時間です(気象庁ホームページより)

自分で町の外へ出たにもかかわらず、大樹町に戻ってきた方を紹介する本企画。今回は、大樹町で司法書士・行政書士事務所、そして不動産事業を経営する播間章浩さんにお話を伺いました。播間さんは、どうして大樹町へUターンすることを決めたのでしょうか？

帰るつもりなんて、無かった

町に戻るつもりなく札幌へ進学した播間さんは、大学卒業後に資格を取得し、24歳のときに司法書士のキャリアをスタートさせました。札幌にある大先輩の司法書士事務所に「間借り開業」し、間借り先の事務所の仕事も手伝いながら自社の仕事をする日々。だんだんと自社の仕事で



手一杯になってきたため、自分だけのオフィスを札幌市内に構えます。そのときは、「自分の人生は札幌で過ごすものだと思っていた」そうです。にもかかわらず、29歳のときに播間さんは大樹町に事務所を移転させました。「町内の方々から『町に戻って、司法書士事務所をやってくれないうか』と声をかけてもらったのがきっかけです。札幌にいなながらも大樹町の案件を請け負っていて、町民の様々な声を聞いていたこともあり、だんだんと町に帰ることを意識していきまし」と播間さん。一度町を離れたからこそ、大樹町が好きだということに気が付いたと言います。生まれ育った町を大切にしたい気持ちがあり、事務所を移転します。

町のためになるなら、全部やるという覚悟

29歳で大樹町に事務所を移転

なるなら」と決心してスタートさせたそうです。しかし、町内の不動産の動きは全く無く、売れた



し、4年後の33歳のときには不動産事業も始めました。「それまで不動産は帯広の会社にお願いでしていましたが、遠いし売れないしであまり良い顔をされなかつたんです」と、播間さんは始めたきっかけを振り返りました。たまたま播間さんが宅地建物取引士の資格を持ってたこと

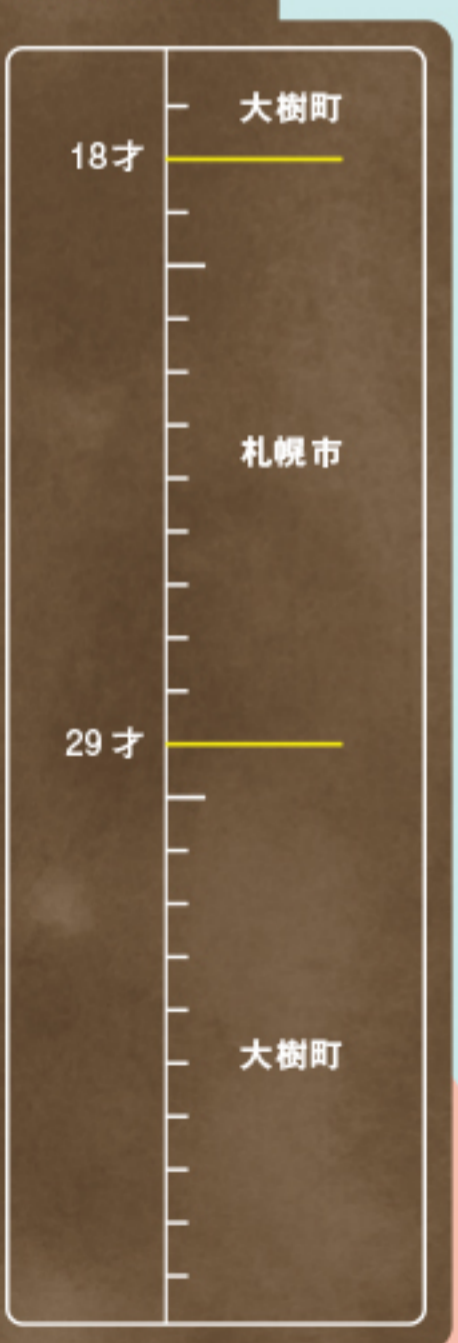
もあり、「町のために

それが、宇宙事業が盛り上がりを見せたことにより、ここ2、3年くらいで一気に動き出した。町内にアパートや一軒家が建ち始め、現在は、町に移住したい人が住む場所を探そうとしても、空き部屋が見つからないほどの状態に。住みたくても住めない状況を解決するために、播間さんは古い物件を買って取り、分譲地をつくるためにまとめて土地を買って取り整備を始めた。町の発展に大きく貢献しています。もともと、「不動産から契約まで、全てを担えると町民や移住者のニーズに応えやすいはずだ。それが町のためになる」という思いから始めた不動産事業は、その言葉の通り、大樹町になくはな

司法書士・行政書士
播間総合法律事務所
電話 6-272-1

くても売れない状態がしばらく続きます。

播磨さん年表



らない存在になりました。

若い世代が頑張って、衰退に歯止めをかけた

どうしてそんなに頑張れるのかを尋ねると、「自分でも『なんでも町のためにこんな貢献してるんだらう?』と思うこともあります」と笑って答えてくれました。「そもそも、町に戻るなら



町に貢献しようと思っで帰ってきましたし、田舎なので若い世代が頑張らないとすぐに衰退してしまうという危機感があるからだと思います」

大樹町に事務所を構えて8年目になる播間さんは、今の大樹町を「かなりいい風が吹いている」と言います。宇宙のまちとしての知名度が上がり、インターネットテクノロジズやSPACE COTANといった宇宙関連企業の飛躍、そして、町内の若手経営者の活躍。これからの大樹町が、とても楽しみです。



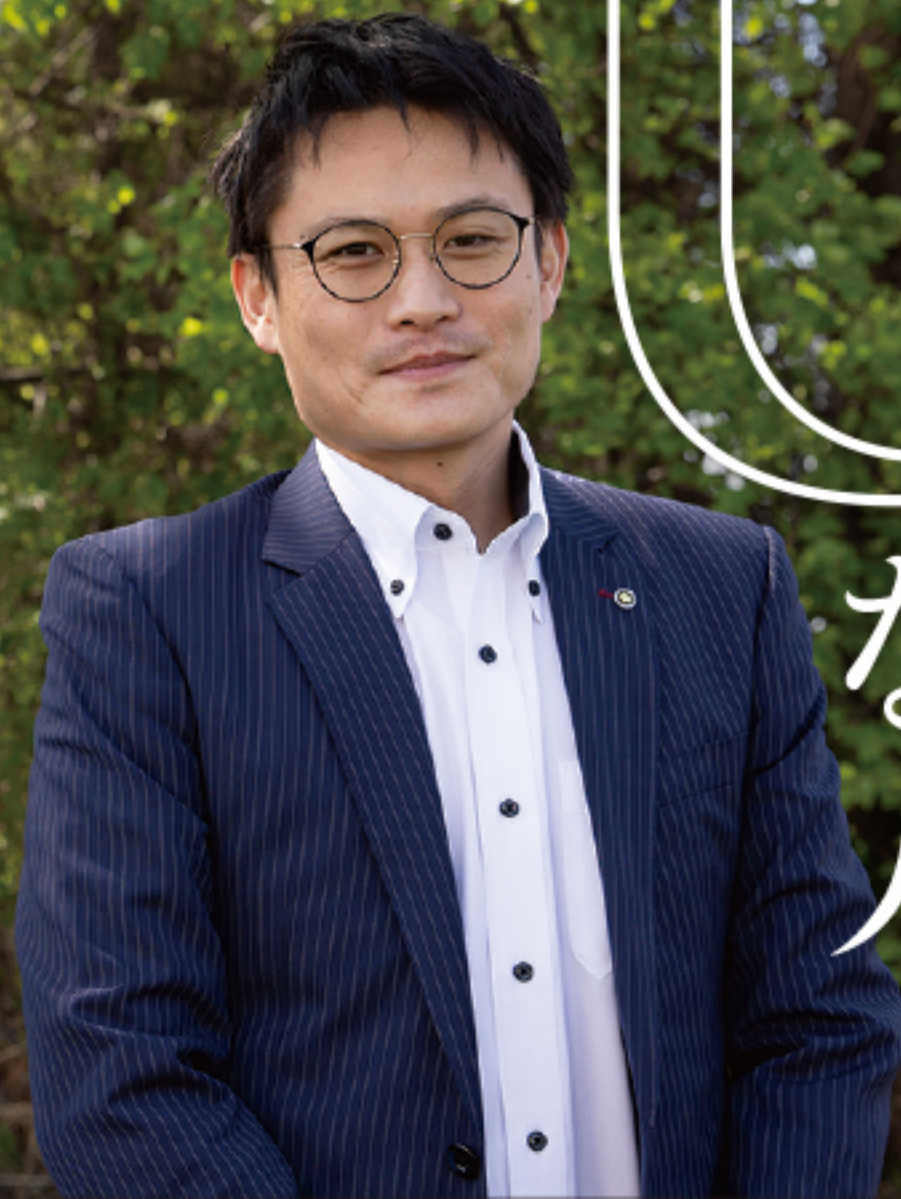
Uターン

な人

播間章浩さん

司法書士・行政書士

1984年大樹町生まれ。大学・社会人を札幌で過ごす。2013年にUターンを決意し町内へ播間総合法律事務所を移設。2017年には不動産売買・仲介業務を担う合同会社HARIMAを設立した。



大樹写真真展



姉崎史奈 Instagram: @anechan06

農家 / 2017年Uターン

生後1ヶ月の和牛の赤ちゃん。和牛の子牛は9ヶ月ほどで市場へ出荷するので、それまでの間、大切に育てています。和牛の子牛は弱く、育てることに難しさを感じますが、まるで子牛の保育園のようで楽しいですし、「癒し」を沢山もらっています。

大樹町に住む人々は、どんなところが町らしさだと感じ、町のどんなところを美しいと思うのだろうか？そんな素朴な疑問からスタートした「大樹写真展」。今回は、2017年に実家の農家を継ぐためにUターンした姉崎さん撮影のお写真を展示させていただきました！

な、なんだって!?

大樹に住んで、
コレに私は驚いた!

神宮司雄祐さん
エンジニア / 町民歴7年



歴舟川がキレイで驚いた!

街の中を流れる歴舟川がキレイでびっくりしました。子どもと一緒に釣りやラフティング、キャンプを楽しめる自然がすぐ近くにあるのはとても魅力的だと思います!

説明しよう!

日高山脈から大樹町内を通り太平洋へ流れる歴舟川。古くから「宝の川」と呼ばれる歴舟川の川底には、激しい流れが運んだ砂金が眠っています。

説明しよう!

寒さが厳しい1、2月。最高気温の平均は-1℃、最低気温の平均は-17℃。気温は低いです、晴れの日が多く寒い日の景色は圧巻。

-20℃の世界に驚いた!

朝日が日高山脈をピンク色に染めるのを眺めながら-20℃の空気を吸い込むと、全身が浄化されたような感覚になり、それがとても神聖なものに感じます。

下山明花さん
木版画作家 / 町民歴5年



小谷将太さん
エンジニア / 町民歴2年



挑戦する人が多く驚いた!

「子供が遊べるようにイベントを企画しよう」「教育体制が足りないなら自分達も参加しよう」と、自分達の想いを実現するために行動する人たちが多くいること!

説明しよう!

父親中心の子育てサークルや、子供が楽しめる緑日、トウモロコシ狩り、そして音楽フェスも!前向きで、チャレンジ精神旺盛な若者がたくさんいます!

これが うまい

美味しいものが溢れる大樹町で、移住者が惚れ込んだ美味しいものをご紹介します！

パッケージは
本誌デザイン
真柳さんが担当



大樹町道の駅「コスモール大樹」で働く佐藤公亮さんが紹介してくださったのは、カウベル大樹株式会社がつくる「大樹ロケット」もなかです！

宇宙のまちらしい、ロケット型のモナカに入ったアイスクリーム。実は、町内のロケット開発企業であるインターステラテックノロジズとのコラボ商品でもあります。アイスクリームは、町内の酪農家から毎朝搾りたての牛乳を仕入れて製造されており、まさに大樹町を象徴する一品です。

ロケットの形も、パッケージもかわい「大樹ロケットもなか」。佐藤さんのおすめは、中にあんこが入っているパニラ味だそう。道の駅「コスモール大樹」のレジ付近にて購入できます。ぜひお試しください！

紹介してくれた人



大樹町商工会
佐藤公亮さん
1982年函館生まれ。29歳で大樹町へ移住。道の駅「コスモール大樹」Twitterも担当。

移住して20年。
おとな人間関係に恵まれ楽しく生活してます
ぜひ大樹町へお越し下さい！
樋口直樹



樋口直樹さん
大樹町役場
企画商工課企画係

役場からの便り

札幌から移住して10年になりますが、都会とは違って人と人のつながりが近く、コミュニティを通じてたくさんの方々と知り合い、楽しく暮らしています。

太田 翼



太田翼さん
大樹町役場
企画商工課企画係

偏愛タイム録

大樹町を選んだ人は、どんなところに惹かれたのでしょうか？
Uターン・Iターンした方々の「偏愛」を、
15年ぶりに町に帰ってきた、服部美咲さんに語っていただきました。

「この町から出ていかないと、私の人生がここで終わってしまふ」と思っていました。大樹町を出たのは15歳になる年。都会というものに興味があった服部さんは、町外の高校に進学するために勉強を頑張ったそうです。高校・大学時代を都会で過ごし、社会人になってからは鳥取県の会社に就職し、合計7年間を西日本で過ごしました。



西日本で目にしたのは、見慣れない竹林や杉だらけの山。鬱蒼として薄暗く、猛烈な速さで成長していく姿を見て「こわい」と感じたそうです。

は真っ白ですが、雪が溶け、徐々に緑が濃くなっていく春の特別感が好きです。厳しい冬を

越えて、ゆったりと芽吹いていく美しさがありますよね。春の美しさは、他では味わえないと思います。戻ってきてから、大樹町は本当に豊かだと思いました。」

小学生の頃は、萌和山で見つけた草花を、図書館で調べて遊んでいたそうです。季節が移り変わる姿を、体いっぱい感じてながら過ごした幼少期でした。現在、白樺やエゾツツジなど、大樹町に生えている草木で染めた布を使った革小物を仕立てようと挑戦中です。大樹町の植物を愛する服部さんが、大樹町の草木で染めた布を使って作るバッグ、楽しみですね。



Photo: Misaki Hattori

服部美咲さん

革作家 / 2021年Uターン

1991年大樹町生まれ。高校進学を機に町を離れ、15年後にUターン。現在はウラルカントというブランドで革製品をつくっている。

Instagram: @urarkanto

